

教師の 腕前診断

文 | 城ヶ崎滋雄 (千葉県船橋市立夏見台小学校)
イラスト | 吉田朋子

今回のテーマ

「凄い」と思わせれば 子どもは先生を尊敬する

今回のテーマは「凄い」と思わせれば子どもは先生を尊敬する」です。

1 量で勝負する

児童会主催の子ども祭がありました。各クラスが趣向を凝らした「お店」を展開します。私のクラスはお化け屋敷です。

天井から新聞紙を吊り下げて通路となる「壁」を作るようになりました。学校の新聞紙では足りません。

係の子どもが帰りの会で「朝刊1日分の新聞紙を持ってきてください」と呼びかけていました。

Q1 あなたならどうしますか。

① 持ってこない。

② 係の子どもの指示通り、朝刊1日分の新聞を持ってくる。

③ 2週間分の新聞を持ってくる。

子どもの自主的な活動を尊重するから「①」という考え方もあります。そういう理由で先生は新聞を持ってこない、と説明すれば子どもたちは納得するでしょう。

しかし、人としてはどうでしょうか。困っている人がいれば、助けるのが人情です。ましてや教師は「人の道」を教える尊い職業です。持つてこないというのは冷たく、非協力的です。

その点、「②」はちゃんと係の子どもの要望に応えています。協力しています。

ただし、朝刊1日分では子どもと同じレベルです。先生は子どもの上に行くべきです。

こういう時は「③」が効果的です。

2週間分の新聞をビニール袋に入れて、出勤します。学校に着いたらそれを係の子どもの机の上に置きます。

しばらくすると係の子どもが登校し、机上の新聞の束に驚きます。

「誰がこんなに持ってきたの?」

「先生だよ」

「凄い。先生、こんなにたくさんありがとうございます。ありがとうございます」

係の子どもは目を白黒させながらお礼を言います。そして、新聞の束を所定の場所に移動しようと、袋を手に取ります。ズシリと重さを感じたようで、思わず「重い!」と発します。

「先生、重かったでしょう。こんなに重い新聞を持って来てくれてありがとうございます」

初めは新聞の量に圧倒されたようですが、今度はその重さに教師の厚意を感じたようです。

感激した係の子どもは朝の会で現物を重そうに抱えてそのことを紹介していました。すると、「そんなに重いのか? 持たせて」と隣に座っている子どもが話しかけています。係の子どもから借り受けると「重い!」と実感します。「先生ありがとうございます」とクラスの子どもがお礼を言います。

翌日、係の子どもの連絡帳に親からの私信がありました。大量の新聞紙を持ってきた事へのお礼と、「私の担任の先生は凄いなだよ」と我が子が先生を自慢していたという内容です。

子どもを通して保護者にも「先生は凄い」と思わせたようです。

2 意外な解釈で「感心」させる

「いくたびも雪の深さを尋ねけり」

教科書に正岡子規の俳句が載っています。「けり」は「くだなあ」「くみたい」と気づきを表します。「何に気づいたのですか」と問います。

Q2 どんな解釈をしますか。

① 大人げない無邪気さに対する恥ずかしさ

② 雪が降っている時間

③ 病状の悪化

④ 雪の深さ

「④」は俳句を読めば、大方の子どもが気づきます。何しろ、書いてあるのですから。

「②」の「雪が降っている時間」については、俳句に直接書かれていません。しかし、「いくたびも」「尋ね」ていることから、雪が降り始めてからしばらく経っていることがわかります。ちよつとレベルの高い解釈です。

「③」は作品の背景に迫る解釈です。

「いくたびも」「尋ね」るほど雪の深さが気になるのなら、自分で障子を開けて確かめればいいのです。しかし、それができないから家族に頼んでいます。一方、頼まれた家族も「何度も聞かないで」と文句を言わずに答えています。

このようなことから、見に行きたくても行けない状況、重い病気で伏していることがわかります。軽い症状ならば家人は「いくたびも」答えません。鬱陶しい、煩わしいと思はずです。

教師の腕前が試される、学級経営のひと工夫。

ベテラン先生によるケーススタディです。

こんな時、あなたならどうしますか？

かなりレベルの高い解釈ですが、気づく子どももいます。それを聞いた友達は「ヘエー」と感心しています。

ところが、「①」の「大人げない無邪気さ」に対する恥ずかしさは子どもから出てきません。

ただ、「いくたびも」聞く経験があります。例えば、「お母さん、ご飯はまだ？」「もういくつ寝るとお正月？」です。気になることは相手の都合を考慮せずに「いくたびも」聞きます。

それに対して、子どもは照れることはありません。一方、正岡子規は大人です。病床に伏しているとはいえ、「雪の深さ」を「いくたびも」「尋ね」るのは大人げない行為です。子規はそれに気づいたのです。そして、恥ずかしくなったのです。

子どもたちに「君たちのお父さんが茶碗を叩きながら『お母さん、ご飯はまだ？』って何度も尋ねたら滑稽でしょ」と聞くと、「子どもみたい」と笑いながら頷きます。「子規はそれに気づいたんだよ」と説明すると、「ヘエー」と言いながら大きく頷きます。

最後に「子規は『尋ね』た後にどんな表情をしたのでしょうか」と問いました。恥ずかしそうに笑っている、という表現が一番多く出されました。そこで、「こういう笑い方を『苦笑い』って言うんだよ」と教えます。すると、今度は「なるほど」と新しい言葉を知って満足した様子です。

子どもたちは自分たちの解釈を超えた教師の説明を聞き、新しい語彙を覚えたことで、知的好奇心を満たされたようです。

「ヘエー」という感嘆の声、「なるほど」という頷き。子どもは、授業を通して「先生って凄

いね」という気持ちになります。

3 コツを体感し、上達を自覚させる書き

書写の時間です。

まず、手本を指でなぞらせて全体指導をします。この時教師は黒板の前にいます。

それが終わると、練習です。机間指導の歩を止めて、筆遣いを教えます。

Q3

どんな風に教えますか。

- ① 手本を指でなぞらせ、ポイントを教える。
- ② 子どもの背後に回り、筆を持って一緒に書く。
- ③ 正対して筆を持ち、一緒に書く。

①は全体指導で行っています。それでも、手本どおりに上手く書けないのです。同じことをもう一度聞いても上達度に変化はないでしょう。

②は字の上達という意味では効果があります。

筆遣いは体感です。例えば、右払いの仕方は口で教えてもなかなか伝わりません。そこで、筆を持って、「払う前は一度止まる↓そのまま横に筆を動かす↓だんだん筆を上げながら動かし、穂先だけになったら筆をゆつくりと上げると、耳で聞いた教師の解説を指で体感できます。「これを『抜く』というんだよ」とコツを言語化して教えます。

子どもの背後に回り、筆を持って一緒に書く

指導は一般的ですが、高学年になると「セクハラ」と誤解される可能性があります。

そこで、私は「③」のように正対して教えています。指導言は「子どもの背後」と同じです。違うのは子どもの前に位置していることです。子どもの技術の習得に教師の位置は関係ありません。

子どもは自分の字が上手くなったことを喜ぶと同時に、教師が逆さ文字を書いている（上逆さまに書いている）ことに驚きます。



「先生は逆からも書けるの。凄いな」と感心します。すると、他の子どもが覗き込んできます。次の子どもにも逆さ文字で教えます。その子どもは紙面ではなく、私の顔を見つめながら筆を動かします。書き終わると、「本当だ。逆だ」と溜息をつき、「先生ごめんなさい。『逆さ文字』に気を取られていたので、先生の説明をちゃんと聞いていませんでした。筆を持ってもう一回一緒に書いてください」と姿勢を正します。「凄い」と思うからリクエストされます。